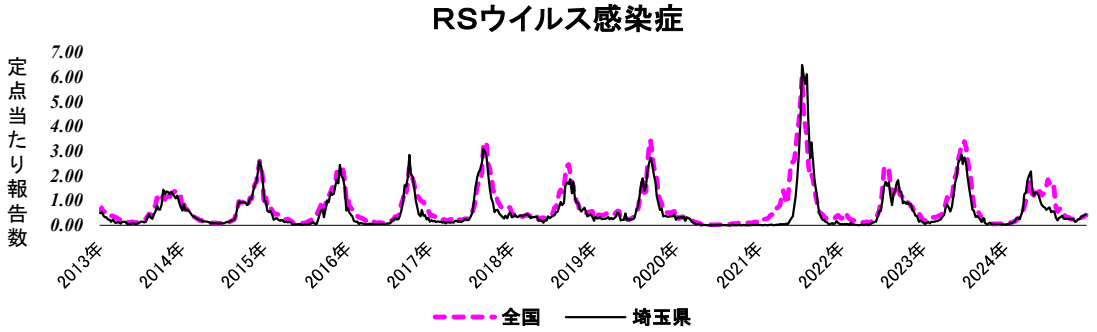
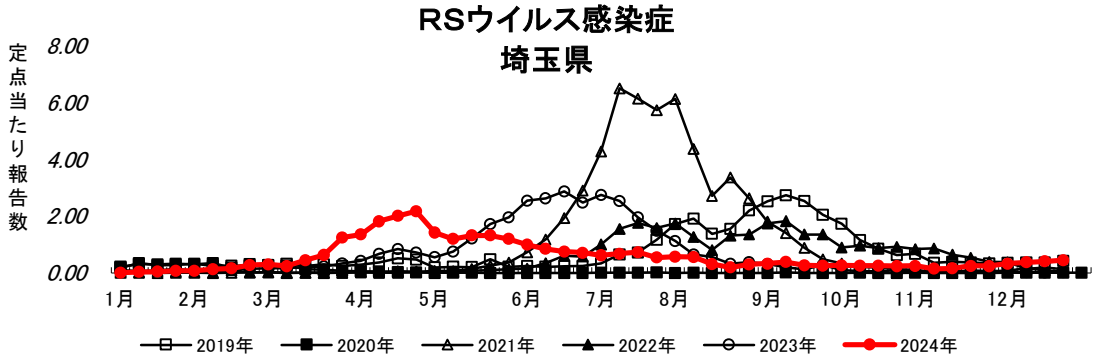
3　小児科定点把握対象疾患の動向

1)　ＲＳウイルス感染症

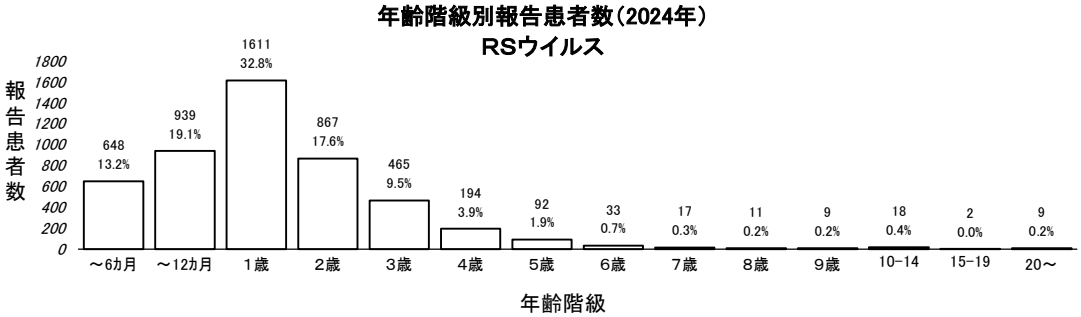
2024 年第 1 週～第 52 週の累積報告患者数は 4,915 人であった。定点当たり報告患者総数 30.34 は前年(35.07)を下回った。定点当たり報告数は、過去と比較しても早い時期である 3 月中旬には増加し始め、第 17 週(4/22-28)には 2024 年の最大値である 2.17 となった。その後、第 34 週(8/19-25)にかけて緩やかな減少が続き、第 35 週(8/26-9/1)から第 48 週(11/25-12/1)にかけては、定点当たり報告数 0.1～0.4 の範囲で推移した。12 月以降は、年末にかけて緩やかな増加に転じた。年齢階級別では全ての階級で報告があり、1 歳が最も多く、2 歳未満が全体の 65.1%であった。



図Ⅱ-3-1　定点当たり報告患者数の年推移(全国比較：ＲＳウイルス感染症)



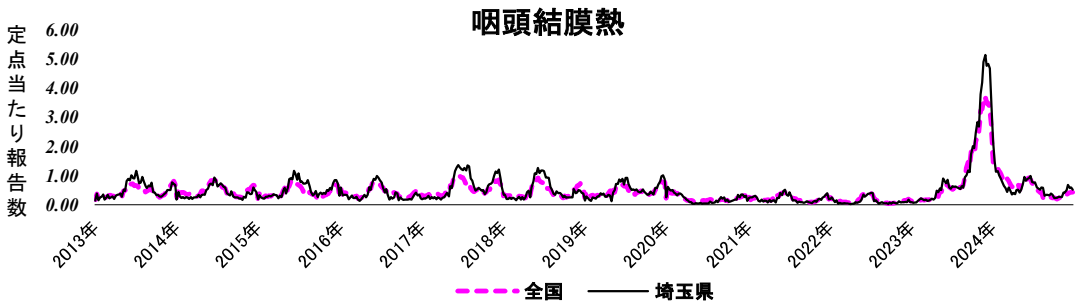
図Ⅱ-3-2　定点当たり報告患者数の推移(埼玉県：ＲＳウイルス感染症)



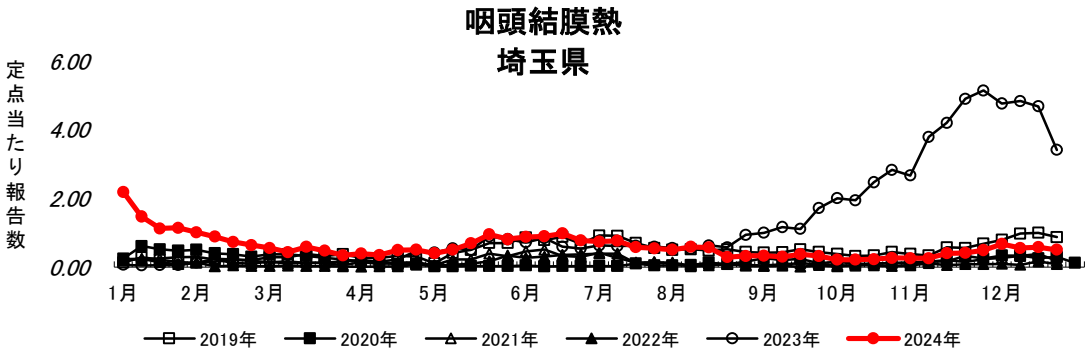
図Ⅱ-3-3　年齢階級別報告患者数(埼玉県：ＲＳウイルス感染症)

2) 咽頭結膜熱

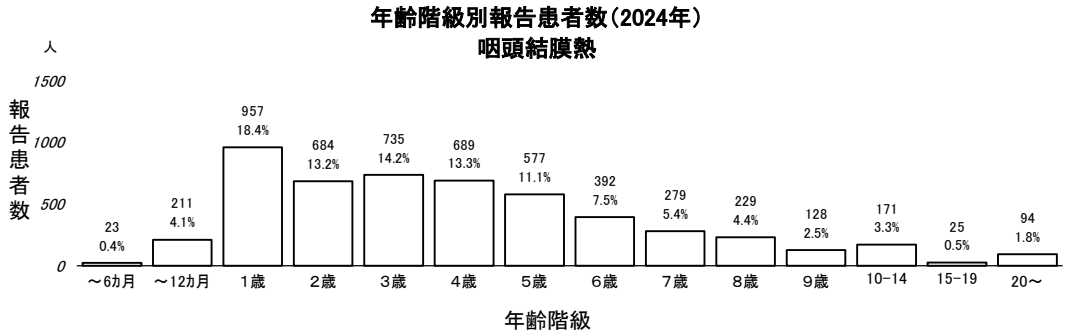
2024 年第 1 週～第 52 週の累積報告患者数は 5,194 人であった。定点当たり報告患者総数 32.06 は前年(68.30)と比較して半減した。前年の第 48 週(11/27-12/3)をピークとする大規模な流行が 2024 年に入っても続いており、3 月にかけて報告が多い状況が続いた。夏季流行は第 20 週(5/13-19)から第 28 週(7/8-14)にかけて、0.70～0.99 のやや高い水準で推移した。その後、11 月にかけて緩やかに減少し、定点当たり報告数 0.20 付近まで減少したが、11 月以降わずかに増加し、0.4～0.7 の範囲で推移した。定点当たり報告数の最大値は、第 1 週(1/1-7)の 2.20 であった。年齢階級別では 1 歳～5 歳が全体の 70.1%で、1 歳の報告が最も多かった。



図Ⅱ-4-1　定点当たり報告患者数の年推移(全国比較：咽頭結膜熱)



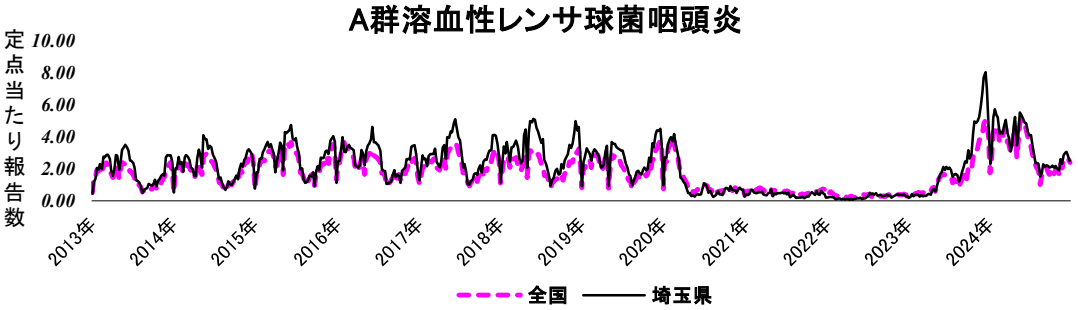
図Ⅱ-4-2　定点当たり報告患者数の推移(埼玉県：咽頭結膜熱)



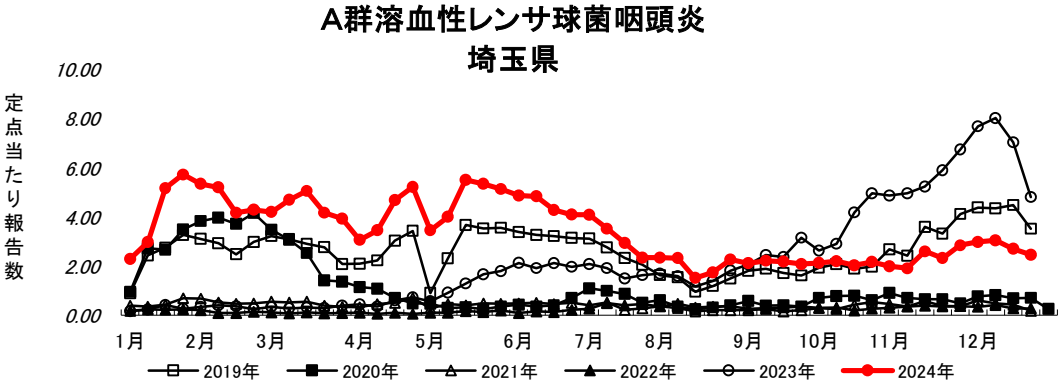
図Ⅱ-4-3　年齢階級別報告患者数(埼玉県：咽頭結膜熱)

3)　Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎

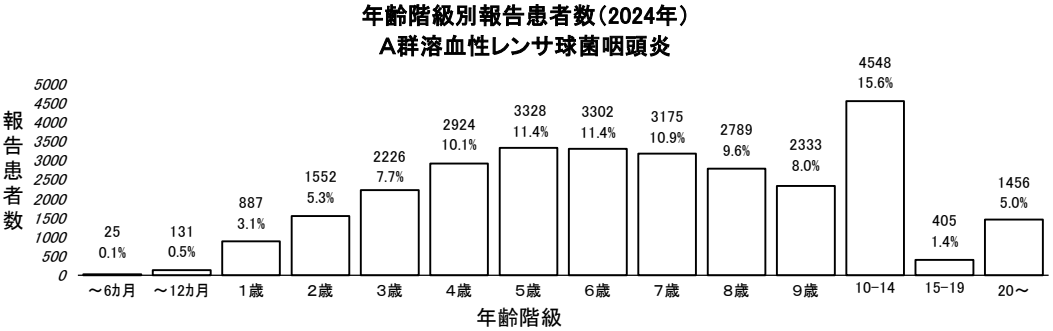
2024 年第 1 週～第 52 週の累積報告患者数は 29,081 人であった。定点当たり報告患者総数 179.51 は前年(116.95)と比較して増加した。定点当たり報告数は、前年の 10 月中旬以降、高い水準のまま 2024 年に入り、第 20 週(5/13-19)にかけて高い水準で増減を繰り返しつつ推移した。5 月下旬から 8 月中旬にかけては減少が続き、9 月以降は定点当たり報告数 2.00～3.00 付近で推移した。2024 年の定点当たり報告数の最大値は、第 4 週(1/22-28)の 5.73 であり、前年の最大値(8.04)と比較すると減少したが、年間を通した流行の規模は前年と比較して大きなものとなった。年齢階級別では全ての階級で報告があり、3 歳～9 歳が全体の 69%で、5 歳が最も多く、6 歳が 2 番目に多かった。



図Ⅱ-5-1　定点当たり報告患者数の年推移(全国比較：Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎)



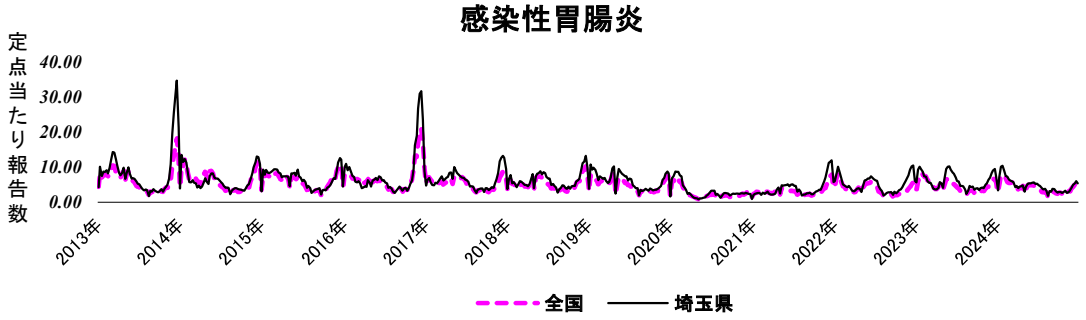
図Ⅱ-5-2　定点当たり報告患者数の推移(埼玉県：Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎)



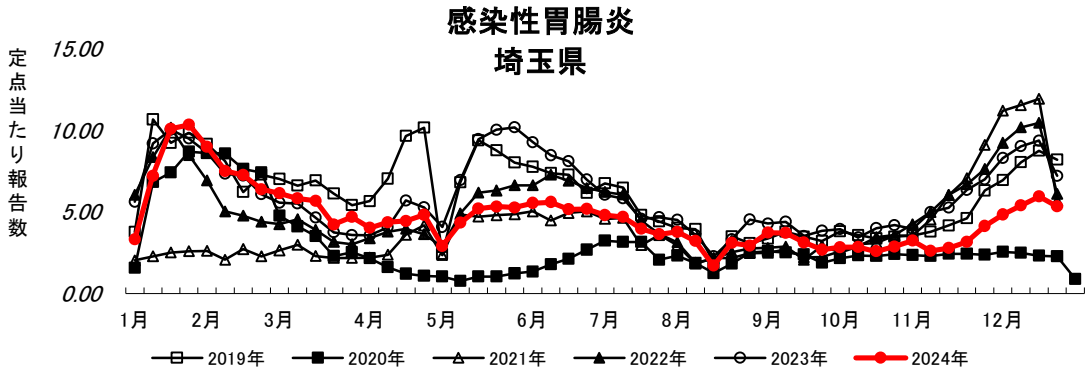
図Ⅱ-5-3　年齢階級別報告患者数(埼玉県：Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎)

4) 感染性胃腸炎

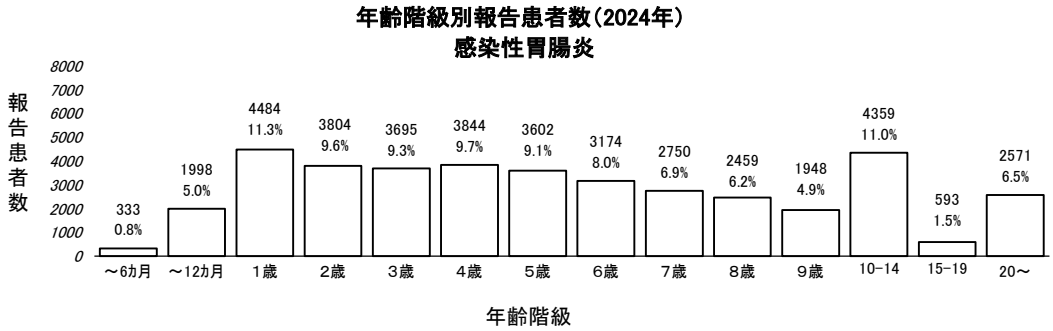
2024 年第 1 週～第 52 週の累積患者報告数は 39,614 人であった。定点当たり報告患者総数 244.53 は前年(312.95)と比較して減少した。2023 年 11 月から 2024 年 3 月にかけての冬季流行が収束した後、7 月上旬にかけて定点当たり報告数 5.00 付近で推移した。2024 年の冬季流行は、11 月下旬から始まり、第 50 週（12/9-12/15）には再び定点当たり報告数 5.00 を超過した。2024 年の定点当たり報告数の最大値は第 4 週(1/22-28)の 10.32 であり、前年の最大値(10.18)と同水準であった。年齢階級別では全ての階級で報告があり、1 歳が最も多く、6 歳以下が 62.9%であった。



図Ⅱ-6-1　定点当たり報告患者数の年推移(全国比較：感染性胃腸炎)



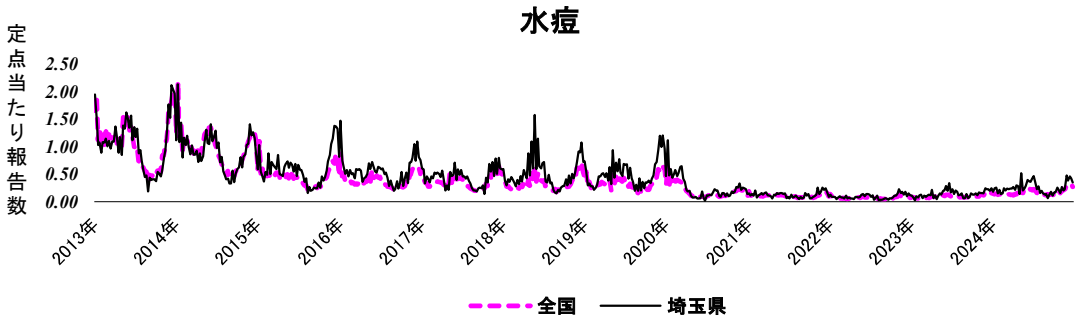
図Ⅱ-6-2　定点当たり報告患者数の推移(埼玉県：感染性胃腸炎)



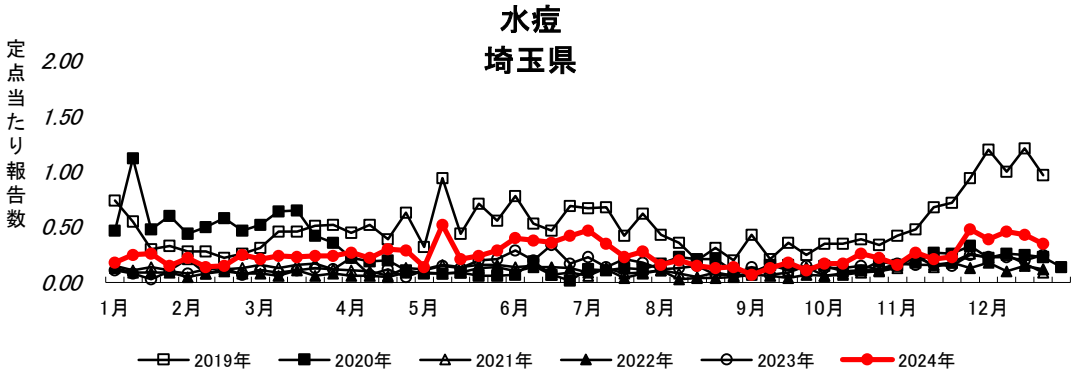
図Ⅱ-6-3　年齢階級別報告患者数(埼玉県：感染性胃腸炎)

5) 水痘

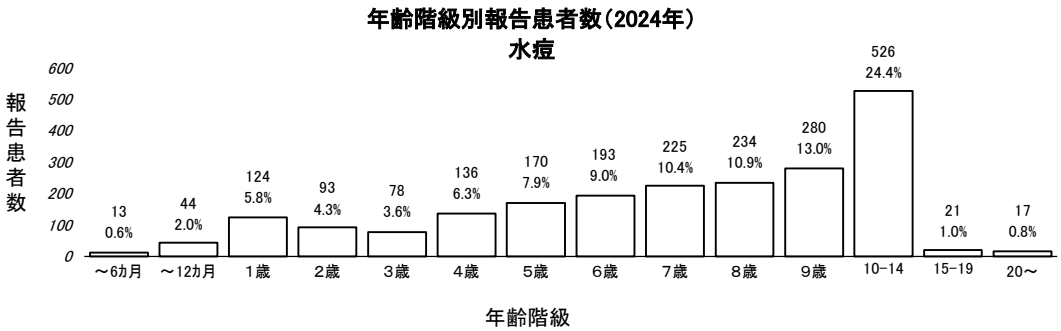
2024 年第 1 週～第 52 週の累積報告患者数は 2,154 人であった。定点当たり報告患者総数 13.30 は前年(7.73)と比較して増加した。2024 年の定点当たり報告数の最大値は第 19 週(5/6-12)の 0.52 で、2020 年の 4 月以降 4 年ぶりに 0.50 を上回ったが、2020 年 3 月以前と比較すると未だにやや低い水準である。年齢階級別では全ての階級で報告があり、9 歳が最も多かった。



図Ⅱ-7-1　定点当たり報告患者数の年推移(全国比較：水痘)



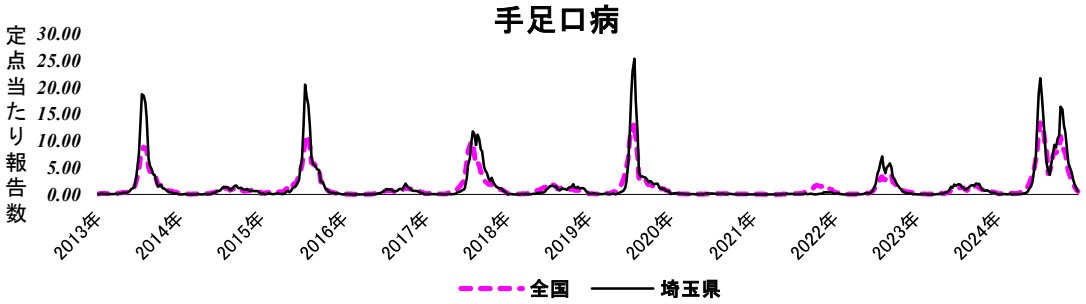
図Ⅱ-7-2　定点当たり報告患者数の推移(埼玉県：水痘)



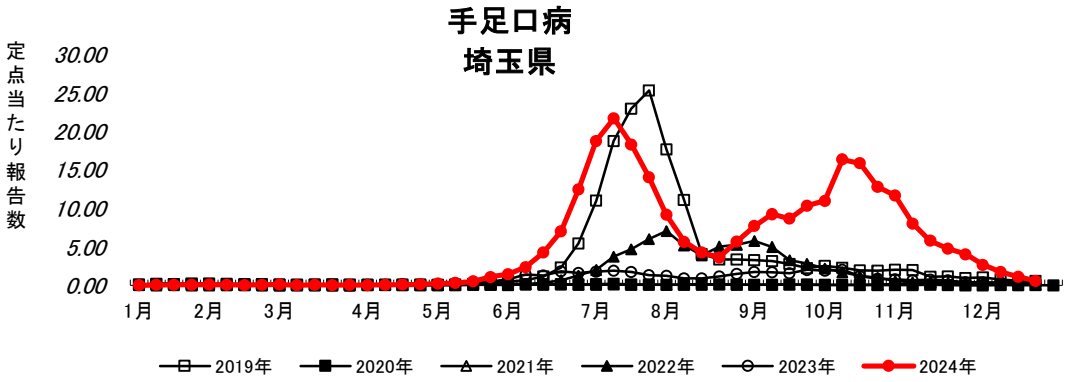
図Ⅱ-7-3　年齢階級別報告患者数(埼玉県：水痘)

6) 手足口病

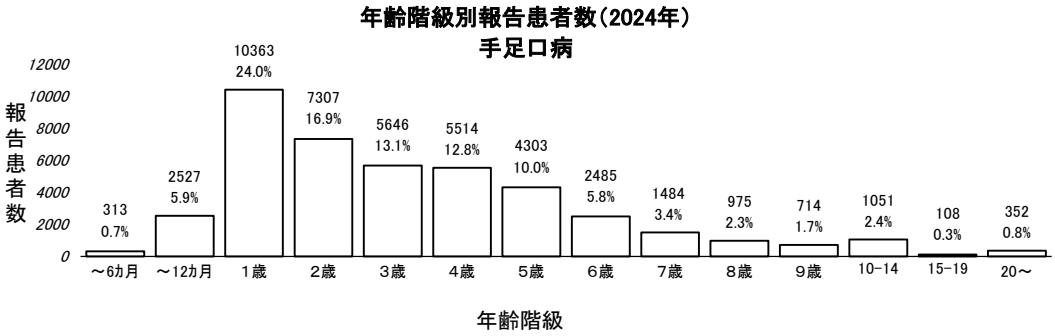
2024 年第 1 週～第 52 週の累積報告患者数は 43,142 人であった。定点当たり報告患者総数 266.31 は前年(39.61)と比較して著しく増加した。2024 年は過去に観察された流行の傾向と異なり、二峰性の大きな流行となった。1 度目の流行は、第 18 週(4/29-5/5)から緩やかに増加し始め、第 25 週(6/17-23)以降急激に増加し、第 28 週(7/8-14)に最大値である 21.74 を迎えた。その後、8 月中旬にかけて一度減少したものの流行が収まることは無く、第 41 週(10/7-13)に 2 度目のピークである 16.39 を迎えた。2024 年の定点当たり報告数の最大値である 21.74 は、2015 年の最大値(20.53)と同水準であった。年齢階級別では全ての階級で報告があり、1 歳が最も多く 1 歳～4 歳で全体の 66.8%であった。



図Ⅱ-8-1　定点当たり報告患者数の年推移(全国比較：手足口病)



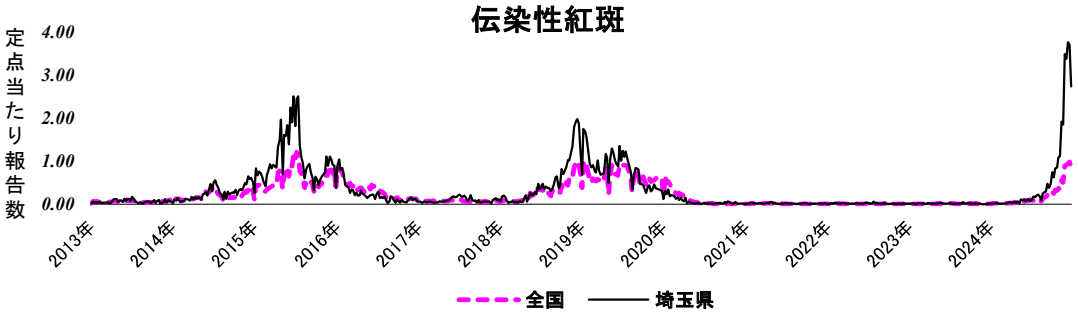
図Ⅱ-8-2　定点当たり報告患者数の推移(埼玉県：手足口病)



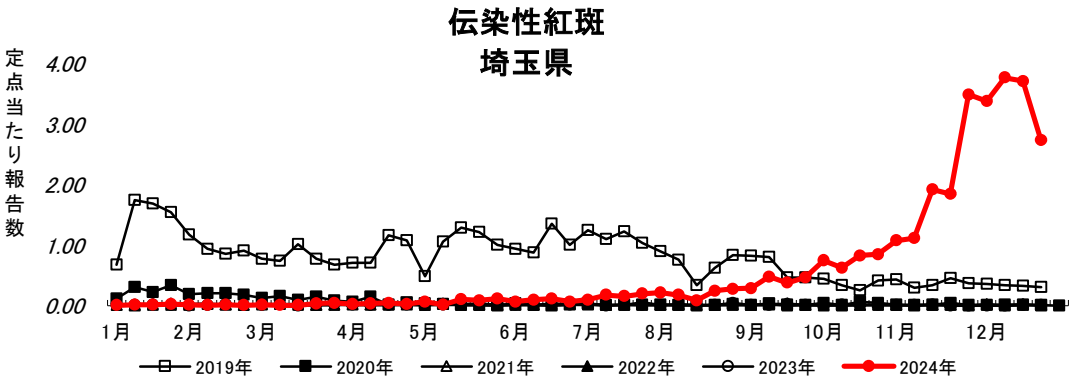
図Ⅱ-8-3　年齢階級別報告患者数(埼玉県：手足口病)

7) 伝染性紅斑

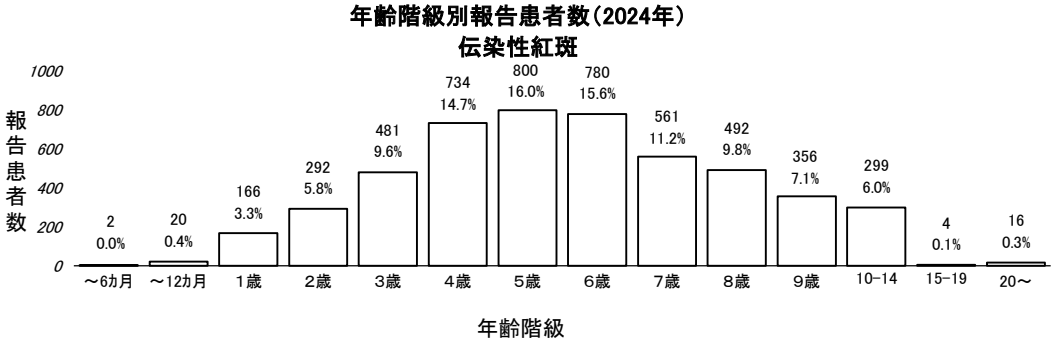
2024 年第 1 週～第 52 週の累積報告患者数は 5,003 人であった。定点当たり報告患者総数 30.88 は前年(0.73)と比較して著しく増加し、2018 年-2019 年以来の流行となった。定点当たり報告数は、8 月中旬までは、2020 年 5 月から続く非常に低い水準で推移していた。第 34 週(8/19-25)以降緩やかに増加し始め、第 46 週(11/11-17)から第 48 週(11/25-12/1)にかけて急激に増加し、第 50 週(12/9-15)に 2024 年の最大値である 3.77 を迎えた。定点当たり報告数 3.77 は、1999 年の感染症法施行以降、最大の値となった。年齢階級別では 5 歳が最も多く、3 歳～8 歳が全体の 76.9%であった。



図Ⅱ-9-1　定点当たり報告患者数の年推移(国比較：伝染性紅斑)



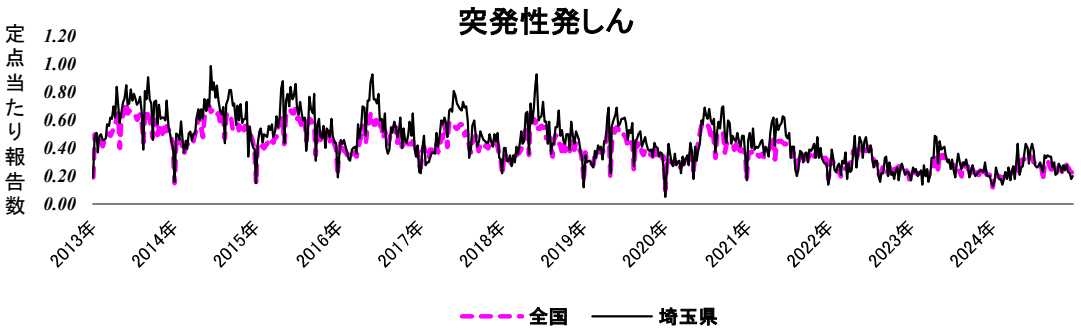
図Ⅱ-9-2　定点当たり報告患者数の推移(埼玉県：伝染性紅斑)



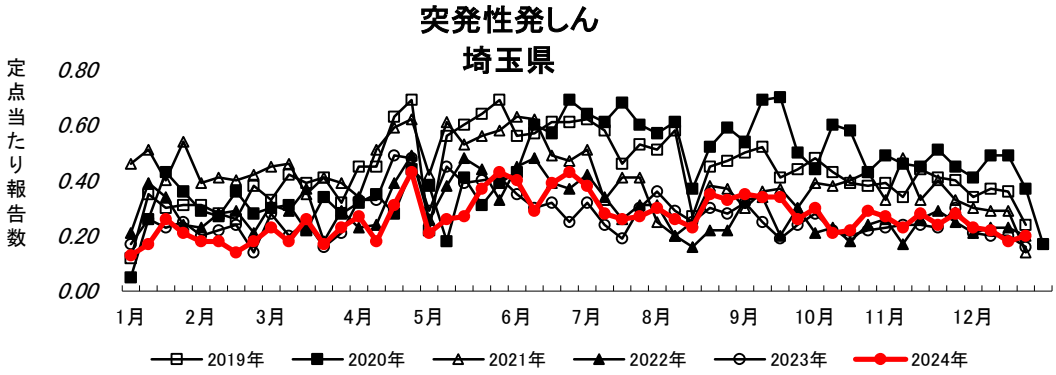
図Ⅱ-9-3　年齢階級別報告患者数(埼玉県：伝染性紅斑)

8) 突発性発しん

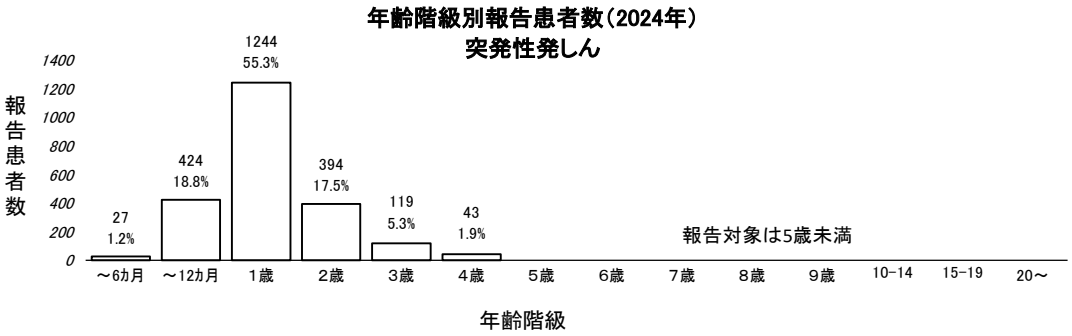
2024 年第 1 週～第 52 週の累積報告患者数は 2,251 人であった。定点当たり報告患者総数 13.90 は前年(14.15)と同水準であった。定点当たり報告数は、例年と同様の動向が観察されたが、年間を通して過去 5 年と比較しやや低い水準で推移した。定点当たり報告数の最大値は第 17 週(4/22-28)、第 22 週(5/27-6/2)、第 26 週(6/24-30)の 0.43 であった。年齢階級別では、例年同様に 1 歳が最も多く、2 歳未満が全体の 75.3%であった。



図Ⅱ-10-1　定点当たり報告患者数の年推移(全国比較：突発性発しん)



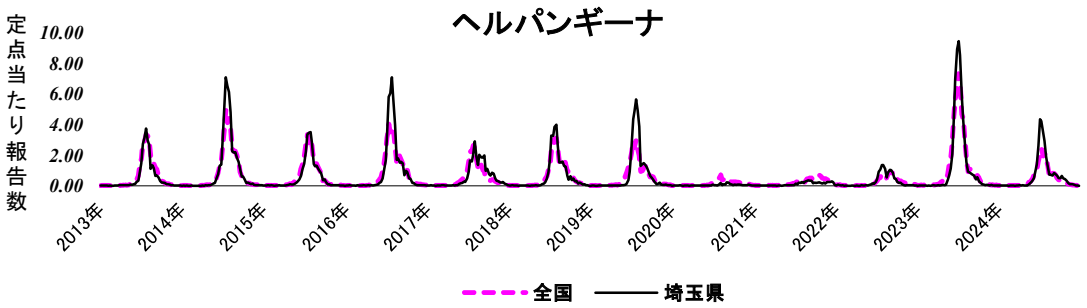
図Ⅱ-10-2　定点当たり報告患者数の推移(埼玉県：突発性発しん)



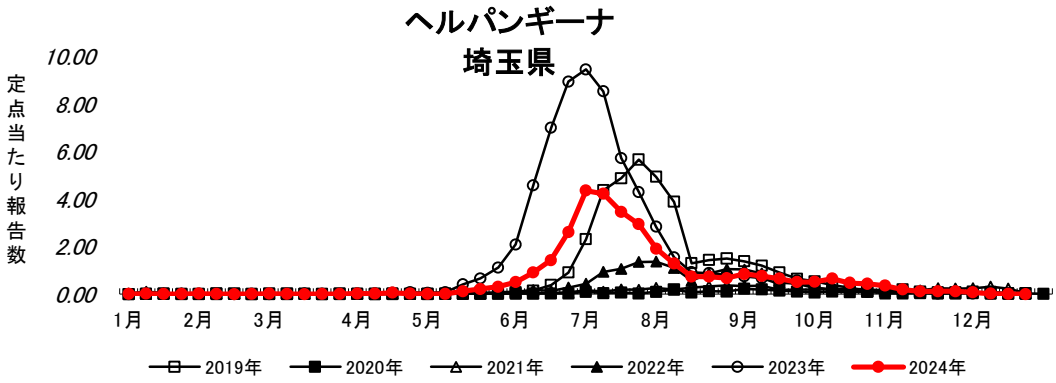
図Ⅱ-10-3　年齢階級別報告患者数(埼玉県：突発性発しん)

9) ヘルパンギーナ

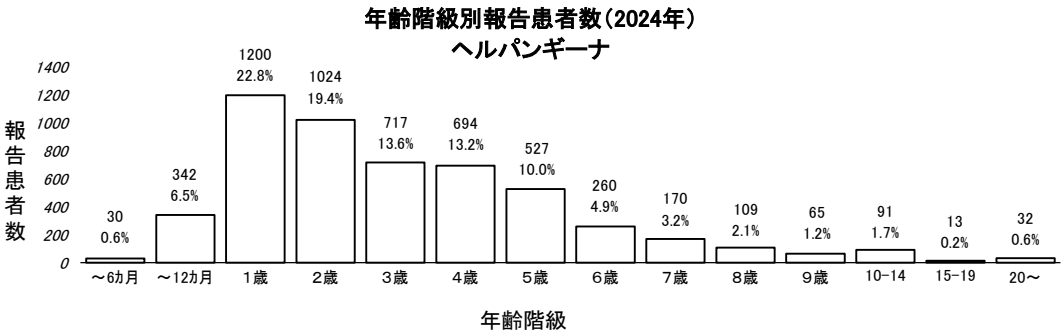
2024 年第 1 週～第 52 週の累積報告患者数は 5,274 人であった。定点当たり報告患者総数 32.56 は、前年(64.40)と比較して半減した。定点当たり報告数は 6 月から増加し始め、第 27 週(7/1-7)に最大値 4.36 の流行が観察された。その後、8 月上旬にかけて減少したが、定点当たり報告数は下がり切らない状況が 10 月まで続いた。年齢階級別では全ての年齢階級で報告があり、1 歳が最も多く、1 歳～3 歳で全体の 55.8%であった。



図Ⅱ-11-1　定点当たり報告患者数の年推移(全国比較：ヘルパンギーナ)



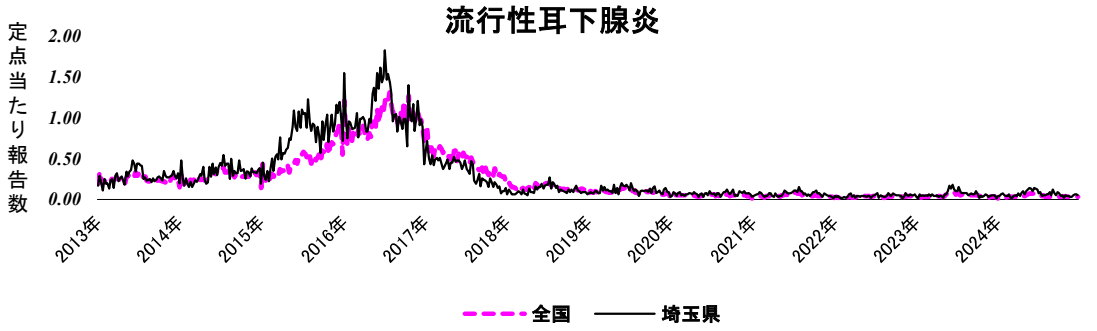
図Ⅱ-11-2　定点当たり報告患者数の推移(埼玉県：ヘルパンギーナ)



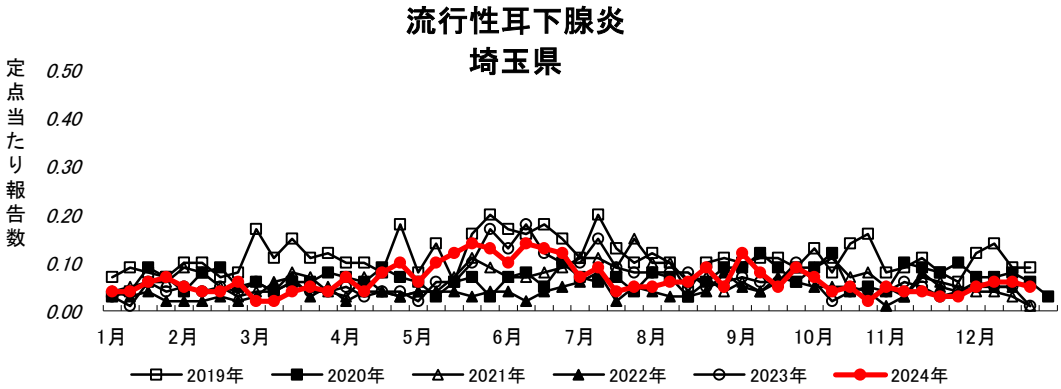
図Ⅱ-11-3　年齢階級別報告患者数(埼玉県：ヘルパンギーナ)

10)　流行性耳下腺炎

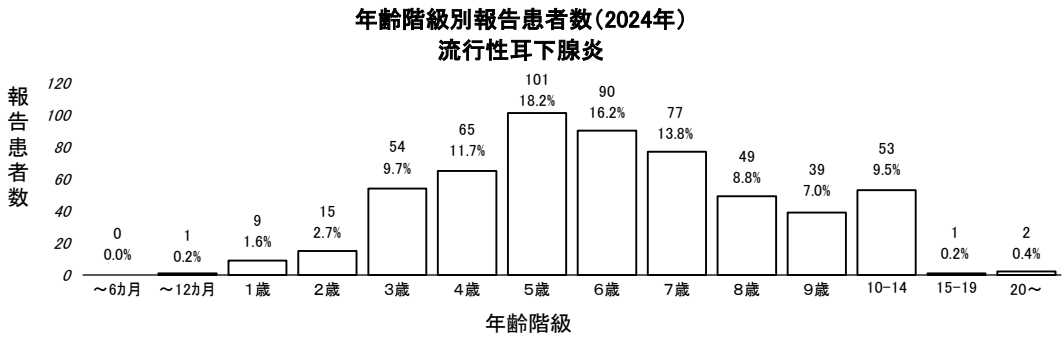
2024 年第 1 週～第 52 週の累積報告患者数は 556 人であった。定点当たり報告患者総数 3.43 は前年(3.29)と同水準であった。定点当たり報告数の最大値は、第 21 週(5/20-26)及び第 24 週(6/10-16)の 0.14 であった。年間を通して過去 5 年と同様の範囲で推移しており、際立った報告数の増加は観察されなかった。年齢階級別では 6 か月未満を除く階級で報告があり、5 歳が最も多く、次いで 6 歳、7 歳と報告数が多かった。



図Ⅱ-12-1　定点当たり報告患者数の年推移(全国比較：流行性耳下腺炎)



図Ⅱ-12-2　定点当たり報告患者数の推移(埼玉県：流行性耳下腺炎)



図Ⅱ-12-3　年齢階級別報告患者数(埼玉県：流行性耳下腺炎)